

慢性疼痛疾患に対する反応良導点治療の検討

～70 症例のチャート変化を通じて～

東日本支部（北海道） 森 健太郎¹ 佐野敬夫²

¹医療法人社団 篠路整形外科 リハビリテーション科

²医療法人社団朋佑会 札幌産婦人科

【目的】 慢性疼痛に対する有効な治療法は未だ確立されていない。本研究では、慢性疼痛に対する新たな治療法として、良導絡を用いた直流電流治療に着目した。本研究の目的は、疼痛部位周辺の皮膚電気抵抗減弱部（反応良導点）へ直流電流刺激を行うことで、慢性疼痛の改善効果を検討・把握することである。

【方法】 対象者は介入の同意を得た 20～86 歳の男女 70 名、内訳は腰部脊柱管狭窄 (LCS) 20 名、頸腰ヘルニア 41 名、肩関節周囲炎 5 名、外側上顆炎 4 名である。介入期間は 10 週間とした。介入期間中は、これまでの治療に加え、疼痛部周囲の反応良導点に対し、刺鍼、直流電気刺激を行った。介入の前後で全身の交感神経活動を、良導絡測定により作成した良導絡チャートにて評価した。介入前後の疼痛の強さは、Visual Analog Scale (VAS) により測定評価した。また、対象者の内、腰部脊柱管狭窄症 (LCS) 20 名については、介入前後の生活の質 (Quality of daily life: QOL) を評価する指標として、アンケートによる痛みの評価 Oswestry Disability Index (ODI) と、腰痛による日常生活の障害を評価する尺度であるローランドモリス質問票を実施した。

【結果】 介入の結果、70 名中 56 名で疼痛の強さ (VAS) は介入前 30～90mm から介入後 5～75mm と有意な低下が確認された。また、介入期間中の治療直後における VAS の変化も 0～78mm と急性的な除痛効果も得られた。良導絡チャートについては 70 名中 39 名に疼痛部位を通る経絡の興奮・全身良導絡チャートの乱れが改善された。生活の質 (QOL) 評価をした脊柱管狭窄症例 (LCS) 20 名では、介入後の ODI では 16～26% の有意な改善、RDQ についても 2～9 点の有意な改善が得られた。

【考察】 慢性疼痛の内「神経障害性疼痛」は、さまざまな原因によって交感神経などが異常な興奮をすることで起こる痛みである。本研究では、刺鍼、通電により一定の疼痛改善効果が得られたが、これは通電により交感神経活動の異常興奮が抑制されたものと推察される。また、局所の交感神経活動の異常を抑えることにより、全身の自律神経に影響し良導絡チャートの改善が見られたと考えられる。

【結語】 本研究により良導絡を用いた直流電気刺激は慢性疼痛に対する新たな治療法となる可能性が示唆された。比較的侵襲も少なく、他の治療法とも併用しやすい本研究の介入方法は、今後さらに注目される治療法であると考えられる。今後は症例数を増すとともに、本研究のさらなる有効性確立に向けた取り組みを行っていきたい。